

小中野中の歴史シリーズ その1「校歌」

小中野中学校は、昭和22年に開校して以来、創立70周年を迎えました。11月22日には、記念式典もひかえています。そこで、今日から何回かに分けて、シリーズで小中野中の歴史を紹介したいと思います。1回目は校歌です。

校歌は、昭和23年6月1日に制定されたそうです。作詞は初代校長を12年間勤められた小沼勉先生、作曲は八戸女子高等学校（現在の八戸東高校）校長の山田実先生です。

歌詞は4番までであり比較的長いのですが、敗戦後で非常に混乱している世情（セジョウ：世の中の様子）を見て、いろいろな願いが心の中に満ちてきたため長くなったという記録が残っています。また曲調について、「楽しんで歌えるものにしたい」ということなのだそうです。私にとっては、若干哀愁（アイシュウ：もの悲しいこと）を帯びた感じに聞こえるのですが、制定当時は生徒に大変親しまれ、お風呂で口ずさんで（クチズサム：歌などを小声で歌うこと）いた生徒も多かったようです。去年の11月、私の学生時代の友人が富山県から八戸に遊びに来た際、市内の郷土料理のお店に連れて行ったのですが、私が小中野中学校の教員だということがわかったと、お店の女性経営者の方が、いきなり「美しき四方の波風…」と歌い出したのにはびっくりしました。それほど卒業生の心の中にも強く残っているのだと思います。

校歌が制定された頃には、東京舞踊文化研究所長で舞踊家の八住正氏による振り付けもあったということが記録に残っていますので、それを簡単に紹介します。

前奏→歌詞をよく体得し誇りと希望に燃えて直立の姿勢で待つ

「美しき」→右足から二歩で直角に右を向き、両手をあげる

「四方の」→二歩で真後ろを向き、手を下ろす

「なみか」→さらに右を向き、手を上に上げる

「ぜ」→正面を向き、手を下ろす

「みちのくの朝は明けたり」→右足を一步前に出し、手を内廻しして下ろす

校長室でちょっとやってみたのですが、何かスムーズに行きませんでした。たぶん、説明の中には書ききれない動作があったのだと思います。それでも、校歌の振り付けは、希少価値（キショウカチ：数が少ないことによって生じる価値）があり、小中野中はさすが伝統校だと感じさせてくれます。さらに、校歌にも関連あることなのですが、校歌が制定された年の10月に、父兄会（当時の保護者会）からピアノが寄贈（キソウ：品物を贈りあたえられること）されました。当時ピアノを持っていた学校は、青森県内では青年師範学校（シハングッコウ：小学校の先生を養成するための学校）野辺地付属中学校と小中野中の2校だけだったようです。

校歌1つをとっても、いろいろな歴史が見えてきます。そして、そこにはコナ中プライドと地域の方々の熱心に応援してくれる気持ちがうかがえます。伝統ある校歌を、ていねいに、そして大事にして歌っていききたいですね。

【今日のひとりごと】

●月曜日の給食前のことです。ある女子生徒がハシを借りに来ていました。助川先生が対応してくれていたのですが、その女子生徒は笑顔で助川先生と会話していました。私も、その女子には何度か声をかけたことはあるのですが、なかなか笑顔を見たことはなかったので、なんとなく「今日はいいことがありそうだ」とうれしくなりました。特に意識していたわけではないのだと思います。自然にこぼれた笑顔だったと思います。でも、笑顔一つが周囲の人の心や気持ちを温かくしてくれるのですね。その女子の笑顔を見たことが、月曜日の私にとってのナンバーワンの“いい出来事”となりました。ちなみに、このことを家に帰って夕飯時に家族に話したら「その女の子、あなたを警戒してるんじゃないの」と言われました。う～ん、女子に警戒される校長って、どんな校長なんだろう？家族に言われたこの一言が、その日の私にとってのワーストワンの出来事になりました。

●4日前の土曜日の朝、起きたらのだに何か引っ掛かる感じがしました。その異物感がどんどん大きくなり、昨日はけっけはう痛くなりました。同様に体もだるくなり、悪寒がしてきたので、昨日さっそく病院に行きました。私を診察してくれた医師によると、そのような症状の患者さんが最近増えているということでした。注射を2本うっていただいたのですが、私としては古い人間なので、その注射2本で何となく元気になりました。「病は気から」ということわざがあります。「病気は気の持ちようによって、良くも悪くもなる」という意味ですが、まさしくそれを感じました。